

観察者の捉え方の多様性に着目した生活の風景に関する研究

渡邊 優

Yu WATANABE

本研究では、生活の場を外から眺める観察者が抱く生活に対するイメージを読み解くことで、主体の多様な生活の風景の捉え方を明らかにすることを目的とする。現場にて写真投影法実験を行い、被験者に生活感を感じるものを写真撮影し、その後、インタビューを行った。被験者の発言から評価観点を分類していき、生活の風景の捉え方の枠組みを明らかにした。また、それをもとに個人の捉え方の特徴や、対象地の特徴についても分析、考察を行った。その結果、個人の捉え方については自身の内面に起因する要因の影響があること、対象地については生活景のステレオタイプとしてあげられるような場所だけが必ずしも共感できる生活の風景として捉えられるわけではないことを明らかにした。

Key Words : 生活感、捉え方、多様性、写真投影法実験

1. はじめに

1.1 研究の背景

1990年代後半より、生活景という概念が注目され、まちづくりにおける重要性が指摘されている。生活景は「生活の営みが色濃くにじみ出た景観」と定義されている¹⁾が、生活の営みというのは地域や住民により異なるものであり、捉える側の感じ方および生活感を感じる対象、つまり手掛かりとなるものも様々であると考えられる。加えて、時代は変化し、ライフスタイルや価値観、暮らしのイメージが多様化してきている。そもそも、生活とはなんであるのか。

従来の生活景についての研究ではそこで生活している住民に焦点を当てて、生活景を評価したり、住民と生活景との関係性を明らかにするアプローチがなされてきた。しかし、生活景はその場で生活している住民にとって日常的なものであり、長い年月を経て、無意識的に生成された風景であるため、大きな変化がない限り、住民に意識されることは少ない。言い換えれば、住民は環境と相互依存関係にあり、生活の場の一部になっているため、自分たちが暮らす場を評価したり、その価値を意識したり、新しい発見をするのは難しいと考えられる。

住民では意識しづらい日常的な生活の風景の価値を考え、まちづくりや教育の中で活かしていく上で、住民以外の観察者が、そのような生活の風景から「生活感」を感じる際に、なにをどのような形で拾い上げ、捉えるのか、明らかにしていく必要があると考えられる。

1.2 研究の目的

本研究では生活の場を外から眺める観察者が抱く生活に対するイメージを読み解くことで、主体の多様な生活の風景の捉え方を捉えられる対象および観察者の内面的な要因の両側面から明らかにすることを目的とする。そして、その捉え方が、ありふれた日常の集積である東京

の生活の場を記述するためのひとつの着目点となることを期待する。また、その着眼点が日常的な暮らしの風景を考える際に、その風景にどのような価値を見出すか、ひとつの手掛かりとなることを期待する。

1.3 概念、用語の整理

1) 既存研究における「生活景」の定義

生活景とは「生活の営みが色濃くにじみ出た景観」、「人間をとりまく生活環境の眺め」とされる¹⁾。人々の生活環境への働きかけによって「生活景」には日常の暮らしの営みが映し出される。後藤らの定義する景観は、「景観＝地域＋風景」である²⁾。ここでは風景は可視的形象と捉えられており、可視的形象を生むに至った背景にある地域単元の風土的、歴史的、社会的文脈をも合わせた統合的な概念を景観としている。つまり風景は景観の視覚的一側面と捉えられている。一方、景観工学の分野で中村は風景は人の主観に強く依存して立ち現われ³⁾、風景という言葉は風合い等の意味が多くあるので、風合いなど主観的なものを切り離して視覚優先の言葉として「景観」がつくられたと指摘している⁴⁾。また、哲学の分野では、例えば木岡は景観は客観的「實在」、つまりたとえ表象されなくても實在が確認されている事実であり、風景は同じ対象が主観的には心に描かれる像、つまり表象であるとしている⁵⁾。

生活景の魅力を語る上で「なんとなく良い」や「雰囲気が良い」といった評価言語が用いられるが、それはまさに主観的な風景の風合いの魅力について述べているのではないだろうか。そこで、「生活景」を「生活景観」ではなく、「生活風景」として捉えれば、風景の風合いや棲みごちの魅力ゆえ生活景の魅力が漠然としていると考えられることができる。

2) 本研究における枠組み

本研究においては生活景の類義語として「生活の風景」という言葉を用いることとする。

①生活の風景の定義

本研究においては観察者が生活感を感じる際にその要因となる風景のことを生活の風景と呼ぶこととする。

②生活感について

大辞泉によると、「人が学び、働くなどの活動を行う、人間らしい雰囲気、また、住まいについていかにも人が

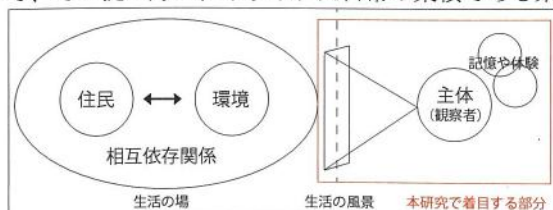


図 1.1 主体と環境の関係

暮らしているとわかるような雰囲気」と定義されている。本研究においては生活感という言葉を実験の指示をする際に使用するが、その際にはあえて生活景、生活感などの言葉の定義を行わずに被験者の認識にまかせて実験を進めることとする。

2. 研究の概要

2.1 既存研究

1) 街路景観に関する研究

街路において、景観構成要素と、人々が抱くイメージとの関係を探ったものに福井らによるグレイン論⁶⁾がある。これは特定のイメージ形成に寄与する共通の属性を持つ施設や要素をグレインと呼び、その密度や分布に着目してまちのイメージを分析するという理論である。また、筆者の先行研究^{8) 9)}においては、生活感が単にグレインのみから感じられるのではなく、地形や建物などの空間構造、人の活動や音、匂いなどといった様々な要因により、複合的に感じられるものだという事を明らかにしている。

2) 生活景に関する研究

野崎ら^{10) 11) 12)}は、尾道において、ヒアリングにより住民が生活景に対して、どのような印象を持ち、現在と過去の生活景をどのような知覚でとらえているのかを明らかにしている。また、古川¹³⁾は生活を営む主体が環境の中で行う行為に着目し、郡上八幡における行為の実態把握、生活主体の行為の履歴と生活場面のイメージや認識との関係性を探っている。生活主体である住民にアンケート、インタビューを行い、住民の生活史に着目し、外から見て評価される生活景を、実際にその景を生み出し支えている生活主体がどう認識しているかということを明らかにしている。一方これらの研究では、外から生活景を眺める主体については言及されていない。

3) 日常風景に関する研究

杉浦らによる地区の空間構造、歴史的建造物から地区の歴史的蓄積を把握し、ヒアリング調査を通じて日常風景を構成する風景要素から居住者の日常風景に対する嗜好性を捉えた研究¹⁴⁾や、吉本らによる日常風景のとらえ方の構造を把握するため、被験者に写真撮影をしてもらい、それをもとにインタビューを行う研究¹⁵⁾などがある。これらの研究では住民を対象として自らが住む環境を評価してもらっている。実験の進め方やデータの整理の仕方が参考になると考えられる。

2.2 本研究の位置づけ

本研究の実験方法は杉浦らや小浦らによる、写真投影法を用いて好きな風景や日常生活の中で目に触れる風景について写真に収めてもらい、ヒアリングを行うというものや、筆者の先行研究において行った実験を参考に決定する。生活景に関する既存研究では、環境と相互依存関係にある住民に着目して研究を進めることが一般的で

あったが、本研究では実験を住民ではなく外から生活の場を眺める来訪者に行ってもらい、結果を分析する。外部から生活の場を眺める観察者を研究対象とし、その捉え方を明らかにしようとしているところに新規性がある。また、その捉え方が、ありふれた日常の集積である東京の生活の場を記述するためのひとつの着目点となりうる点、日常的な暮らしの風景を考える際に、その風景にどのような価値を見出すかの議論において、ひとつの手掛かりとなりうる点で有用性があると考えられる。

2.3 研究の流れ

以下に研究の流れを示す。

1) 実験方法の検討および仮説の提示

予備実験を行い、本実験の方法を検討すると同時に、得られたデータから生活の風景の捉え方の仮説を提示する。

2) 風景のサンプルおよび語りの採取

複数の対象地においての写真投影法実験および実験後のインタビューでの発言から、生活の風景として捉えられたものを抽出する。

3) 被験者の生活史および実験後の印象の把握

現場実験の後に被験者にアンケートを依頼し、自身の生活の経歴や現場実験についての簡単な質問項目に回答してもらう。

4) 生活の風景の捉え方の枠組みの提示

現場実験から得られた全被験者の発言を分類、考察し、生活の風景の捉え方の枠組みを提示する。

5) 生活の風景として捉えられた対象の分析

対象地の写真が撮影された箇所や、撮影対象の分析を行い、対象地の特徴について考察する。

6) 個人の捉え方の特徴の分析

提示した枠組みをもとに、各被験者について発言を集計し、被験者それぞれの捉え方の特徴についてアンケートの結果を交えて分析、考察を行う。

3. 実験方法および可能性の検討

3.1 予備実験概要

1) 予備実験の目的

本研究で対象とする生活感という感覚は写真や映像からは感じ取れない様々な要因によって感じるものだと考えられる。そこで、現場歩行実験を行い、被験者が実際にその場所で感じた印象を計測し、分析に用いることを目的とする。また、本実験の実験方法を検討することも目的とする。

2) 予備実験の概要および方法

表3.1に予備実験概要を図3.1に方法を示す。

3) 予備実験対象地

今回の研究は東京都心の住宅地を対象として行った。現地調査を行った結果、高層ビルや商業地と隣接しており、さまざまな雰囲気をあわせ持ちながら各々性格が異なると考えられる四谷、麻布、月島の3地区を選定した。

表3.1 予備実験概要

日時	2010.11.18 ~ 2010.12.08 10 ~ 16時の明るい時間帯
対象地	四谷、麻布、月島の設定経路
被験者	社会環境工学科の学生、土木を専攻していない学生 および社会人を対象とし、各箇所30名ののべ90名
指示	<ul style="list-style-type: none"> 生活感の定義：生活感とは“人が住まいで衣食住を中心とした活動を行った結果、にじみ出る雰囲気”とします。 実験の方法 <ol style="list-style-type: none"> ①地図を持って、地図に描かれた経路を歩いてもらいます。指定された経路を時間内に歩き終わるならば、多少経路から外れた道に入っても、経路を戻っても構いません。 ②経路を歩く際、感じたことを、写真を撮影する、メモをとることによって覚えておくようにしてください。地図に書き込んで構いません。これは義務ではないので自分が印象を覚えていられるならばやらなくても構いません。また、生活感を感じたとき、その要因となっている要素があれば地図にメモする、プロットする、などしておいてください。 ③経路を歩き終わった後に生活感を地図に示す5カ所で、5段階で評価してもらいます。【この実験の最終目的】また、評価した理由、要因となったものを自由記述で答えてもらいます。これは②でメモしたものと写真などを参考に経路全体を思い出しながら記入してもらいます。

ていくと、被験者の注目の仕方にはいくつかのパターンがあることが明らかになった。被験者の記述から12の捉え方のパターンが導かれた。

- ①ものから想像できる人の生活の様子
- ②ものに施された工夫から想像できる人の生活の様子
- ③ものの密度
- ④人の活動、音や匂いなど直接的な情報
- ⑤内部情報
- ⑥幅員、地形、空間的要因
- ⑦新旧、経年
- ⑧実際の居住の有無、建物用途
- ⑨対比
- ⑩調和、統一感、まちなみ
- ⑪風景全体
- ⑫自身の生活との近さ

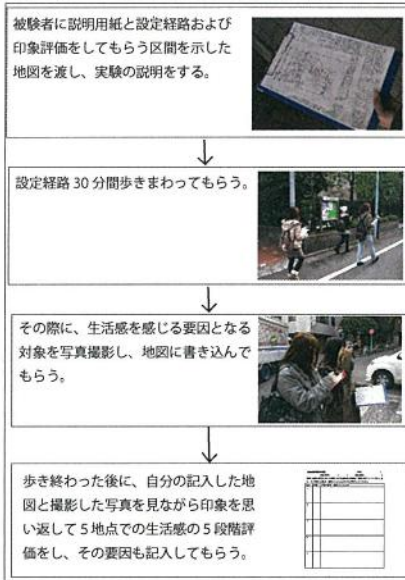


図3.1 予備実験の方法

また、得られた上記の12のパターンから、生活の風景を捉える仮説となりうる枠組みを図3.3に示す。

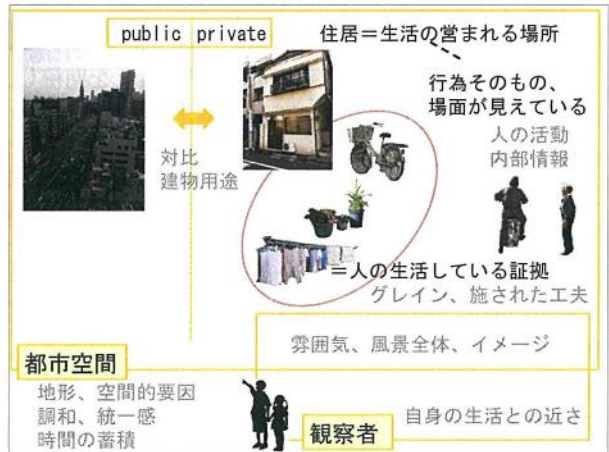


図3.3 生活の風景の捉え方についての仮説

地点	評価	評価の理由、要因となったもの
1	+	1. 高層ビル、看板が印象的だった。 2. 緑地帯の多いエリアが印象的だった。 3. 活気のある、目撃者の多いエリアが印象的だった。
2	-	1. 高層ビル、看板が印象的だった。 2. 緑地帯の多いエリアが印象的だった。 3. 活気のある、目撃者の多いエリアが印象的だった。
3	2	1. 高層ビル、看板が印象的だった。 2. 緑地帯の多いエリアが印象的だった。 3. 活気のある、目撃者の多いエリアが印象的だった。
4	+	1. 高層ビル、看板が印象的だった。 2. 緑地帯の多いエリアが印象的だった。 3. 活気のある、目撃者の多いエリアが印象的だった。
5	+	1. 高層ビル、看板が印象的だった。 2. 緑地帯の多いエリアが印象的だった。 3. 活気のある、目撃者の多いエリアが印象的だった。

図3.2 実験シートの一例

3.2 予備実験結果

予備実験後に被験者に書いてもらったシートの一例を図3.2に示す。図3.2の印をつけた部分を今回の分析では使用する。

被験者の生活感印象評価値にも様々な傾向が見られることから、定義を行ったにも関わらず、人によって生活感の捉え方は異なるということがわかる。そこで、被験者が何に注目して生活感を評価したのかを自由記述欄および撮影写真から定性的に分析する。被験者の記述を見

3.3 予備実験の成果と課題

予備実験では被験者の自由記述欄から生活感を感じる風景の捉え方のパターンを抽出し、分類し、生活感とはどのようなところから感じられるものなのか、仮説をたてることができた。

しかし、あくまでも自由記述欄であるため、実験の際に被験者が撮影した写真を必ずしも一対一対応になっていないために、被験者が何を思っどどのような箇所から生活感を感じたのか、詳細に知ることができないことが課題としてあげられる。

4. 風景のサンプルおよび語りの採取

4.1 現場実験概要

1) 実験の目的

実験の目的は実際の空間において、人がどのようなところから生活感を感じ、生活の風景を捉えているのかを詳細に把握することである。本実験では被験者がどのように風景を視覚的情報として受け取っているのかを写真撮影によって把握するとともに、各々の写真に対してインタビューを行い、その視覚的情報の内容と意味、背景等を言語化してもらい、視覚的情報を言語データ化する

ことにより、生活感を感じる際の風景の捉え方を分析する基礎データとする。

2) 実験の概要

表4.1に現場実験の概要を、表4.2に現場実験の被験者の詳細を示す。

3) 実験の方法

- ①被験者に上記の指示が書かれたカードおよび、経路が示された対象地の地図、カメラを渡す。
- ②被験者に写真を撮りながら経路を歩行してもらい、実験者は動画を撮影しながら追尾調査を行う。
- ③実験後、被験者が撮影した写真をパソコンのスクリーンで見ながら、インタビューを行い、ボイスレコーダーで記録する。

4.2 実験対象地

1) 対象地選定の意図

実験の対象地は新宿区の都心の住宅が密集する地区2カ所と都心から比較的離れた練馬区の住宅地2カ所の計4カ所である。被験者が多様な発見をすることを期待し、様々な種類の住宅が見られる地区を選定した。また、各4カ所は雰囲気異なる地区を選定した。

2) 実験対象地概要

①新宿区富久町・余丁町

新宿区のは中央に位置し、人口密度が高い地区である。商店街があり、個人経営の店舗が多い。起伏はほとんどないが、街路は入り組んでいる。

②新宿区坂町

四ツ谷駅からほど近く、四ツ谷独特の急な坂や階段が多く見られる地区である。住宅が密集しており、地区の周辺には業務地も多数見られる。

③練馬区旭町

光が丘団地から少し離れたところに位置する。個人商店が数軒見られるほか、市民緑地がある。新宿と比べて

表4.1 現場実験概要

対象地	①新宿区富久町②新宿区坂町③練馬区旭町④練馬区谷原三丁目の住宅地の全長約600mの街路
被験者	研究室卒業生、修士2年の学生6名および都市、建築を専攻していない社会人9名の計15名
指示	① 地図に示された経路を歩いてもらいます。多少経路から外れた道に入っても、経路を戻っても構いませんが、指定された経路はすべて通るように歩いてください。 ② 経路を歩く際、被験者が歩いた経路を詳細に記録するため、筆者がビデオを撮影しながら追尾調査を行います。 ③ 経路を歩く際に、生活感を感じたら、どこ(なに)から感じたのか、要因となっているかを簡単に地図に書き込み、その様子がわかるように写真を撮ってください。 ④ 写真に写らないような音、におい、雰囲気などの要因も感じられれば地図に記入してください。 ⑤ 新鮮な気持ちでできるだけたくさんの発見をしてください。 ⑥ 実験に時間制限は設けませんが、30分を目安に歩いてください。 ⑦ 実験終了後にカフェなどに移動し、簡単なインタビュー調査を行います。実験中に撮影した写真や記入した地図を見ながら、写真や記入からだけでは読み取れない部分の補足説明をしてもらいます。

幅員は広く、建て売りの新しい住宅も多い。街路が曲がりくねっている。

④練馬区谷原三丁目

光が丘団地から少し離れたところに位置する。公営団地や小規模なアパートが複数見られるほか、古い住宅が並ぶ。街路は幅員が比較的広く、整然としている。

表4.2 被験者の属性と実験、インタビュー日時詳細

*いずれも2012年*対象地は1:富久町,2:坂町,3:旭町,4:谷原三丁目

属性	ID	年齢/性別	対象地	実験日	実験時間	インタビュー	写真枚数	有効枚数	
研究室OB	1	25歳 /男	1	5/19sat.	11:15-12:00	12:55-13:15	51	48	
			2	10/31wed.	15:20-15:50	16:13-17:03	78	77	
		3	11/5mon.	14:28-14:49	15:22-16:04	55	54		
		4	11/5mon.	16:19-16:38	17:32-18:22	67	66		
	2	22歳 /男	1	5/19sat.	16:10-16:35	14:50-15:09	27	26	
			2	10/26fri.	14:08-14:28	14:50-15:09	24	24	
		3	12/17mon.	15:13-15:29	15:49-16:15	26	23		
		4	12/17mon.	16:34-16:51	17:21-17:46	27	25		
	研究室修士2年	3	24歳 /男	1	6/25mon.	16:55-17:20	17:40-18:00	29	29
				2	11/2fri.	15:21-15:48	16:00-16:38	41	37
			3	11/9fri.	14:47-15:00	15:24-15:53	19	19	
			4	11/9fri.	16:05-16:18	16:56-17:23	16	14	
4		23歳 /女	1	6/30sat.	11:10-11:25	11:45-12:05	33	33	
			2	10/26fri.	11:10-11:29	11:45-12:05	27	27	
		3	11/5mon.	10:00-10:12	10:33-10:46	18	18		
		4	11/5mon.	10:55-11:07	11:39-11:54	21	21		
5		24歳 /男	1	7/2mon.	16:50-17:25	17:50-18:50	97	88	
			2	10/27sat.	11:10-11:33	11:55-12:20	39	37	
		3	10/27sat.	14:00-14:23	14:40-15:08	35	33		
		4	10/27sat.	15:40-16:00	16:35-17:15	28	27		
6	24歳 /男	1	7/4wed.	11:00-11:40	12:05-12:40	86	86		
		2	11/4sun.	15:16-15:34	15:49-16:26	47	47		
	3	11/22thu.	14:32-14:48	15:13-15:41	42	42			
	4	11/22thu.	15:52-16:09	16:39-17:15	56	56			
都市・建築を専攻していない社会人	7	23歳 /男	1	9/16sun.	14:15-14:30	15:07-15:19	40	37	
			2	12/13thu.	11:12-11:26	11:50-11:59	30	28	
		3	12/13thu.	13:12-13:25	13:49-13:57	27	26		
		4	12/13thu.	14:41-14:54	15:52-16:03	23	23		
	8	24歳 /男	1	9/18tue.	10:15-10:25	10:56-11:04	53	40	
			2	11/14wed.	15:20-15:32	16:05-16:21	33	29	
		3	11/15thu.	14:41-14:50	15:09-15:20	19	18		
		4	11/15thu.	15:37-15:47	16:27-16:39	24	24		
	9	24歳 /女	1	9/19wed.	16:35-16:50	17:11-17:38	45	44	
			2	12/9sun.	16:29-16:47	17:11-17:55	80	79	
		3	11/23fri.	13:00-13:18	14:21-15:52	74	74		
		4	11/23fri.	14:36-14:51	16:04-16:38	69	68		
10	24歳 /女	1	9/22sat.	10:30-10:55	11:25-11:43	50	48		
		2	11/10sat.	12:15-12:33	13:01-13:18	25	24		
	3	11/10sat.	14:21-14:36	14:56-15:14	31	31			
	4	11/10sat.	15:32-15:49	16:22-16:46	41	39			
11	25歳 /男	1	9/27thu.	14:30-14:45	15:00-15:19	25	25		
		2	11/1thu.	15:00-15:14	15:40-16:14	38	38		
	3	11/8thu.	14:06-14:17	15:02-15:25	34	33			
	4	11/8thu.	15:34-15:46	16:50-17:15	36	36			
12	26歳 /男	1	9/27thu.	17:00-17:45	17:50-18:47	140	120		
		2	12/21thu.	11:01-11:28	12:02-12:43	94	82		
	3	12/21thu.	13:50-14:18	14:35-15:09	108	94			
	4	12/21thu.	17:20-17:52	15:33-15:57	70	64			
13	24歳 /女	1	11/3sat.	12:20-12:43	13:00-13:17	20	19		
		2	11/3sat.	13:56-14:16	14:42-15:00	25	24		
	3	12/9sun.	11:49-12:07	12:33-12:49	23	23			
	4	12/9sun.	13:33-13:54	14:42-15:01	31	30			
14	23歳 /女	1	11/13tue.	14:25-14:49	15:11-15:25	38	37		
		2	11/13tue.	15:56-16:16	16:41-16:56	47	44		
	3	11/20tue.	14:27-14:42	15:03-15:15	28	28			
	4	11/20tue.	15:34-15:49	16:28-16:41	35	34			
15	25歳 /男	1	11/25sun.	10:18-10:40	10:57-11:14	43	43		
		2	11/25sun.	11:38-12:03	13:27-13:41	51	43		
	3	11/25sun.	13:59-14:16	14:51-15:05	36	35			
	4	11/25sun.	15:29-15:49	16:22-16:38	37	35			

表6.1 テキスト分析から抽出した被験者の生活の風景の捉え方の分類

ID	項目	例	分類
1-1	人	自体	住民の存在
1-2		密度	
1-3		ディテール	
1-4		行為	
2	音、匂い	ラジオの音/バイクの音/小学校のチャイム	空間の状態
3	内部情報	磨りガラスの向こうが見えて/家の中から人の声がして	
4	痕跡	打ち水がしてあった/セロテープの跡	
5-1	要素	自体	
5-2		密度	
5-3		ディテール	
5-4		置かれ方、環境	
6-1	建物	自体	空間の状態
6-2		密度	
6-3		ディテール、部分	
6-4		用途	
7	空間構成	道が狭い/囲われてる感じ/奥まった場所	時間
8	蓄積	使い込まれてる/だいたい年季ははってるなあって	
9	時間、季節	風が吹いてて/昼間の雰囲気/夕焼け/夏だから	
10-1	雰囲気、シーン全体	全体的に/ものというよりシーン/人の通りが醸し出す雰囲気	
10-2	まちの全体像	この辺、古い家多かったよね/まち全体がきちんと手入れされてた	全体像
11-1	対比	シークエンス	
11-2		遠方との対比	
11-3		アクセント	
12	知識、一般的視点	大きな通りじゃ絶対見ないものだよな/新宿とか中野ってこういうところ、多いんだよな	観察者の内面
13	想像	たぶん几帳面な人なんだろうなって/お得意さんがたくさんいて生計たててるんだろうな	
14	疑問	なんでここに置くの?/車出す時、邪魔じゃないのかな?	
15	印象、評価	暮らしやすそう/活気みたいなのを感じた/雑すぎる/隙がある感じ/すごい変	
16	新鮮さ、珍しさ	初めて見る/こういうのあんまり見ないよね/珍しいよね/俺の家の近くにはない	
17	意志	こういうところに住みたい/ここでタバコ吸ったりできそう	
18-1	馴染み	間接的な体験	
18-2		直接的な体験	
18-3		具体的な体験	
19	過去の記憶	自分も昔こういうのに乗ってたから懐かしい/小学校の頃よくやった	

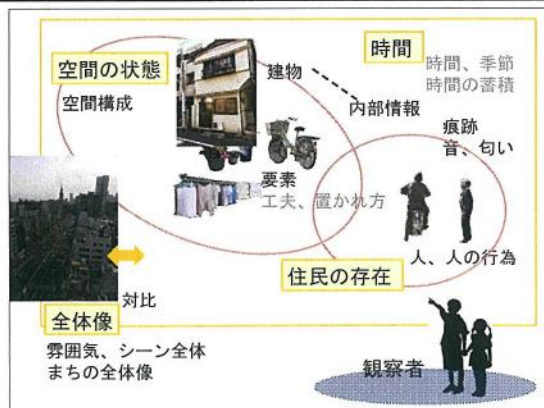


図6.2 生活景の捉え方の枠組み (対象)

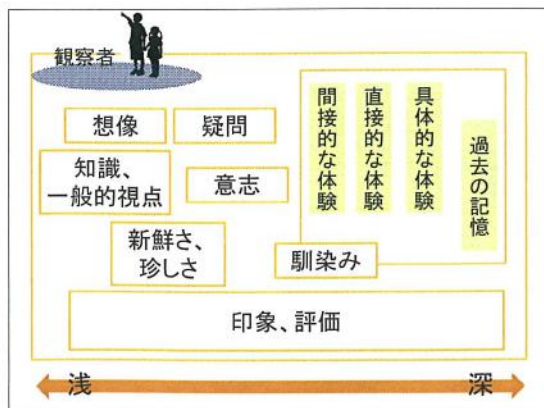


図6.3 生活景の捉え方の枠組み (内面)

ディテール、建物やそのディテールといった複数の対象を指摘し、想像、過去の記憶、珍しさ、印象、評価といった複数の事柄を想起しており、7の発言がされたとみなす。

6.2 抽出された捉え方の分類

テキスト分析の結果、生活の風景の捉え方は表6.1のように19分類で表すことができ、対象となるものは大きくわけて住民の存在、空間の状態、時間、全体像の4つがあり、その他に観察者の内面があげられる。観察者の内面についての発言は対象となる住民の存在、空間の状態、時間、全体像の4項目のいずれかと必ずセットで登場することが明らかになった。

6.3 生活の風景の捉え方の枠組みの提示

抽出された19の分類から、生活の風景を捉える際の枠組みを図6.2および図6.3に示す。

7. 生活の風景として捉えられた対象の分析

7.1 写真が撮影された対象の分析

1) 歩行経路、写真撮影箇所の記録

被験者を追尾し撮影した動画および被験者が撮影した写真から、15名の被験者がどのように歩行し、どの場所で写真が撮影されたのかを図7.1のように対象地の白地図にプロットした。プロットした4対象地の地図



図 4.1 対象地地図 (上: 新宿区 / 下: 練馬区)



図 4.2 対象地写真 (左上: 富久町、右上: 坂町、左下: 谷原三丁目、右下: 旭町)

4.3 得られたデータ

本実験では、被験者 15 名の各 4 対象地における撮影写真、合計 2612 枚、各々の写真に対するインタビュー、実験の様子を撮影した動画が得られた。写真についてはインタビュー中に被験者がなぜ撮影したか覚えていない場合や、被験者が見返してみたところ、この写真は関係がないと判断した場合、違うアングルから同じものを複数枚撮影している場合などは、その写真を無効と判断した。有効枚数は合計 2476 枚である。

5. 被験者の生活史および実験後の印象の把握

5.1 アンケート調査の目的

実験後一定期間を置き、①被験者が今までにどのような場所で生活してきたのか、②対象地の全体的な印象についての 2 点を把握するためにアンケート調査を行う。これは実験結果と照らし合わせる資料として使用する。

5.2 調査概要

アンケート調査の概要を表 5.1 に示す。

表 5.1 アンケート調査の概要

配布期間	現場実験のすべての箇所が終了した後 2012/12/29 ~
配布方法	手渡し、郵送、メール
配布対象	現場実験の被験者 15 名 (回収率:100%)

5.3 質問項目

アンケートの質問項目を以下に示す。なお、回答内容については実験結果の考察において随時言及する。

- 1) 設問 1: あなたが今までどのように生活してきたのか、表にできるだけ詳しく記入して下さい。期間が短期でも、1ヶ月以上住んでいた場所は記入してください。
- 2) 設問 2: まちを観察し、生活感を感じるときに気になった点はなんですか？
 - ① 植栽や洗濯物などの要素や要素の置かれかた、要素に施される工夫
 - ② 建物の造りや建物の用途、建物の種類
 - ③ 道路の幅員や空間の広さなどの空間的なもの
 - ④ 人がいるか、人の活動が見られるかどうか
 - ⑤ 音が匂い、水がまいてある、室外機が回っているなど、間接的な人の気配
 - ⑥ 建物の古さなど、歴史的な蓄積を感じるもの
 - ⑦ 全体的な雰囲気や情景
 - ⑧ 経路内での対比や、遠方との対比
 - ⑨ その他 (具体的に記入してください)
- 3) 設問 3: 今回の実験では合計 4 カ所を回りましたが、4 カ所についてのあなたのイメージ、その 4 カ所の違い、比較などを覚えている範囲で聴かせてください。対象地について覚えていない場合、同封の写真を参考に対象地を思い出して記入して下さい。また、4 カ所の中でもっとも生活感を感じた地区と最も親近感がわいた地区をそれぞれ教えてください。(設問 3 については実験後長い期間が経過した被験者もいるため、対象地について思い出せるように、被験者自身が撮影した写真を印刷し、全員に配布した)

6. 生活の風景の捉え方の枠組みの提示

6.1 テキスト分析の方法

書き起こしたインタビューのテキストデータをその意味に着目して読み、それぞれの写真について、被験者がなにをもって生活感を感じているかを分類した。図 6.1 のように該当する文章に下線を引き、項目の ID を付ける作業を行った。図 6.1 の例は 1 枚の写真で要素の


これはなんか、子どもの自転車がいっぱいあって、こんなに狭いアパートな要素のディティール 要素の密度 建物、ディティールのにこんなに!? と思って。しかも、多分、遊びに来てる子ども集団がいて、

遊んでるんだろうなっていう。まあ、多分全部がこの住人の自転車じゃない想像

し、なんかこう小学生の頃に遊んで、自転車をその家の前に置くと言う過去の記憶

をちっちゃいころはよく見たけど、東京にきてから、そういうとこって、時間帯があわないのかもしれないけど、あんまり見えないなと思って。なんかこれもな珍しさ

んかすごい...ノスタルジーっぽい。印象、評価



得られた発言

①要素のディティール

②要素の密度

③建物のディティール

④想像

⑤過去の記憶

⑥珍しさ

⑦印象、評価

図 6.1 テキスト分析の一例

を参考に、被験者に多く指摘された対象について、特徴的な例をあげながら考察していく。

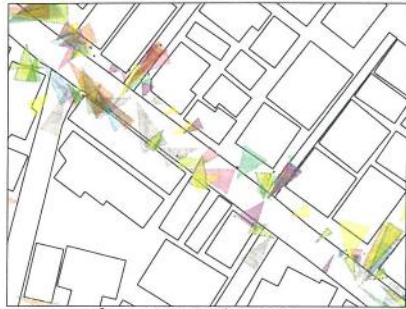


図7.1 プロットした地図の例

1) 富久町

富久町では人に関する指摘や間接的な人の気配に関する指摘が多くなっていること、建物の用途、つまりは店舗など、住居以外の建物についての指摘が目立って多くなっていることがあげられる。これは、商店街があり、小規模な個人店舗が多く、その周辺に人の活動が活発に見られたことによるものだと考えられる。小さな商店や古い建物があり、人が活発に活動している様子を見て「珍しい」「新鮮だ」といった印象を持った被験者も多くいた。4カ所の中で最も写真撮影枚数と発言の量が多くなった地区である。



図7.2 富久町で撮影された写真の例

2) 坂町

坂町では坂や階段、路地などが多く、その空間構成についての指摘や、傾斜があり、住みにくい土地に工夫をして人が暮らしている様子についての指摘が多くなって



図7.3 坂町で撮影された写真の例

いた。また、坂町は本来古い建物が非常に多くある土地であったと思われるが、建て替えが進んで、新しい建物も多く建ち始めていることも特徴的で、古い住宅やアパートも多く指摘された一方で、新しい住宅やマンションも多く指摘された。

3) 旭町

旭町では、小さなアパートが多く指摘された。特徴的なのは、「小さいころ住んでたアパートにすごい似てるんだよね」「アパートの廊下に小学生がいてよく鍵忘れて家に入れなくなったのを思い出した」といったようにそのアパートに自身の内面を重ねた被験者が非常に多かったことである。また、旭町には畑があるが、この畑も多く指摘され、多くの被験者が自身の記憶や内面について語った。また、旭町では塀の上に植栽を同じような置き方で置いている家が多かったり、その家も庭に必ずと言っていいほどホースがあつたりと、地域全体でのまとまりがあり、それを指摘した被験者が複数いたことが特徴的である。これは谷原三丁目においても同様であった。



図7.4 旭町で撮影された写真の例

4) 谷原三丁目

谷原三丁目は小さな公園や団地、古い住宅街など、「日本のよくある住宅地」といったイメージを持った被験者が多くいた。まず、団地の脇にある小さな公園を非常に多くの被験者が指摘した。「よくある公園だよ」といった発言もあれば、「懐かしい」「よくこういう公園で遊んだ」という自身の記憶に関する発言や「子供が遊んで



図7.5 谷原三丁目で撮影された写真の例

表7.1 写真枚数と発言数および発言平均

被験者	富久町				坂町				旭町				谷原三丁目			
	発言合計	写真枚数	有効枚数	発言平均	発言合計	写真枚数	有効枚数	発言平均	発言合計	写真枚数	有効枚数	発言平均	発言合計	写真枚数	有効枚数	発言平均
1	127	51	48	2.65	229	78	77	2.97	207	55	54	3.83	204	67	66	3.09
2	82	27	26	3.15	96	24	24	4.00	119	26	23	5.17	114	27	25	4.56
3	108	29	29	3.72	114	41	37	3.08	89	19	19	4.68	59	16	14	4.21
4	107	33	33	3.24	109	27	27	4.04	71	18	18	3.94	71	21	21	3.38
5	330	97	88	3.75	109	39	37	2.95	137	35	33	4.15	117	28	27	4.33
6	278	86	86	3.23	208	47	47	4.43	177	42	42	4.21	204	56	56	3.64
7	75	40	37	2.03	61	30	28	2.18	64	27	26	2.46	66	23	23	2.87
8	133	53	40	3.33	65	33	29	2.24	49	19	18	2.72	94	24	24	3.92
9	181	45	44	4.11	302	80	79	3.82	240	74	74	3.24	238	69	68	3.50
10	146	50	48	3.04	92	25	24	3.83	101	31	31	3.26	121	41	39	3.1
11	91	25	25	3.64	162	38	38	4.26	124	34	33	3.76	122	36	36	3.39
12	378	140	120	3.15	270	94	82	3.29	255	108	94	2.71	180	70	64	2.81
13	78	20	19	4.11	67	25	24	2.79	76	23	23	3.30	94	31	30	3.13
14	82	38	37	2.22	90	47	44	2.05	66	28	28	2.36	79	35	34	2.32
15	102	43	43	2.37	98	51	43	2.28	96	36	35	2.74	82	37	35	2.34
	2298	778	723	3.18	2072	679	640	3.21	1871	575	553	3.49	1845	581	562	3.37

様子がいいなあって」「今は人がいないけど、団地が近い、日曜は子供が集まるんだろうね」といった発言もされ、多様な解釈がされた。また、一般的に生活の風景とは認識されにくいと思われがちなハウスメーカーの新しい家も多く指摘された。他には、水の音がする庭が非常に多く指摘された。一見ツタが繁っており、覗きこまないと気付かないが、水の音がすることにより多くの被験者が気にとめたという点で特徴的である。

7.2 対象地間の比較

また、発言の分類の合計や写真の撮影枚数、有効枚数を以下の表7.1にまとめ、分類の合計を写真の有効枚数で割った値を算出した。これは写真1枚あたりいくつの発言がされているか(=発言平均)を表す値である。

それぞれの対象地について比較していくと、写真枚数や発言の分類合計に関しては新宿の富久町と坂町の方が多いことがわかるが、発言平均の値については練馬の旭町、谷原三丁目の2地区の方が大きくなっていることがわかる。ここから、練馬の方が写真1枚に対しての発言の内容が多くなっているということがわかる。また、図7.6の4対象地の発言内容(対象および内面)の割合について見ていくと、新宿の富久町と坂町よりも練馬の旭町と谷原三丁目の方が、被験者の内面に関する発言(12~19)が多くなっていることがわかる。また、全被験者に当てはまることではないが、練馬2カ所のほうが比較的「懐かしい」や「親近感」、「よくある」「よく見

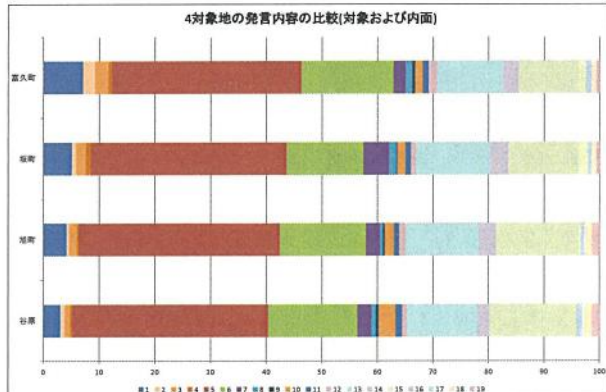


図7.6 対象地の発言内容の比較

る」「見たことある」などの言葉が多く発言されている。

また、表7.2に示すように、実験後に日をおいて行ったアンケート調査では「最も生活感を感じた地区」に多くの被験者が富久町や坂町をあげているのに対して「最も親近感がわいた地区」としてはほとんどの被験者が旭町や谷原三丁目をあげている。

以上の3点から、人の活動が活発に見られる富久町では生活感を強く感じた被験者が多いために写真枚数や発言も多くなり、多様な捉え方がされていると考えることができる。同時に、生活景のステレオタイプにあげられるような路地に植栽が溢れているような雑多な風景やシーンとは異なり、決して特殊とは言えないありふれた住宅地である練馬のような場所でも、共感し、自身の内面を多く語れるような風景体験が起こりうるということが明らかになった。

表7.2 アンケートの結果

被験者	最も生活感を感じた地区	最も親近感がわいた地区
1	坂町	旭町
2	富久町	富久町
3	旭町	谷原三丁目
4	坂町	谷原三丁目
5	谷原三丁目	谷原三丁目
6	旭町	旭町
7	谷原三丁目	旭町
8	富久町	富久町
9	富久町	谷原三丁目
10	富久町	谷原三丁目
11	富久町	旭町
12	富久町	富久町
13	富久町	谷原三丁目
14	旭町	谷原三丁目
15	富久町	谷原三丁目

8. 個人の捉え方の特徴の分析

8.1 対象について

被験者15名の発言の分類の割合(対象についての発言のみ)を示したグラフを図8.2に示す。このグラフからわかる指摘のパターンについて説明していく。

1) 人の活動や痕跡を多く指摘

このパターンは人や人の活動についてや、音や匂い、

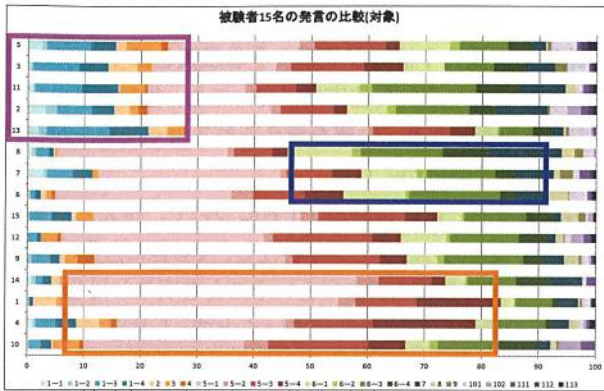


図 8.2 被験者 15 名の発言の比較 (対象のみ) 人が施した痕跡を多く指摘している。



図 8.3 人や人の活動を指摘した写真の例

2) 建物や空間構成を多く指摘

このパターンは建物そのものや建物の部分やディテールについて、また、道全体や道の狭さ、坂や階段などの空間構成を多く指摘している。



図 8.4 建物を指摘した写真の例

3) 要素やその状態について多く指摘

このパターンは植栽や洗濯物などの要素やそこに施される工夫などを細かく指摘している。要素そのものを捉えているというよりは、そこに施された工夫や要素の置かれ方を特に多く指摘している。



図 8.5 要素やその状態を指摘した写真の例

このように、被験者によって捉える対象に傾向が見られることがわかる。

8.2 内面について

被験者 15 名の発言の分類の割合 (自身の内面についての発言のみ) を示したグラフを図 8.6 に示す。このグラフからわかる自己の内面を対象に見出すパターンについて説明していく。

1) 想像できる生活の様子

図 8.6 の 1 の印に示す被験者は対象に対する想像や疑問を多く発言していた。これは対象の背景に暮らす人

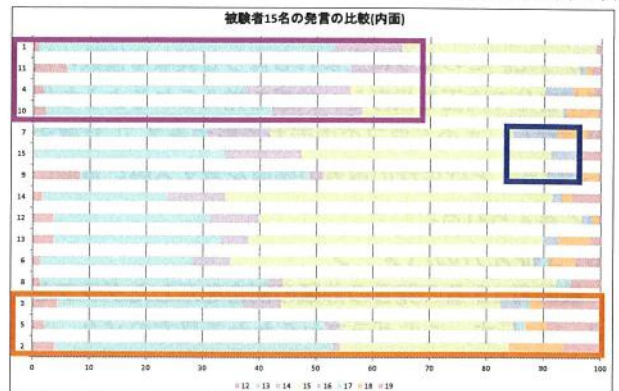


図 8.6 被験者 15 名の発言の比較 (内面のみ)

のことを思い描いて「几帳面な人なんだろうなあとと思って」「きっとは子供が住んでるんだろうね」「この階段を上る人が想像できるよね」「これから帰って夕飯の支度するんだろうね」などといった発言をしていた。

2) 自身の生活との対比

本図 8.6 の 2 に示す被験者は自身の生活と対象地の生活を対比しての発言が他の被験者よりも多く見られた。「自分と同じで共感する」というのではなく「私だったらこうするのに、この場所では違っていて珍しい、すごい」といった内容が多く見られた。

3) 初めて見るのに懐かしい

図 8.6 に示す被験者 2, 3, 5 の 3 名については新宿の対象地 2 箇所と練馬の対象地 2 カ所で大きく捉え方が変化した被験者である。例として被験者 5 の対象地ごとの発言内容の割合を図 8.7 に示す。新宿 2 カ所では要素についての発言が多かったのに対し、練馬に 2 カ所においては建物や空間構成、全体的な雰囲気といった大きなスケールでの発言が多くなり、撮影された写真もまち全体を写したものが多くなっている。また、新宿 2 カ所よりも練馬 2 カ所にて自身の内面に起因する発言、とりわけ「馴染み」や「過去の記憶」について多く発言されていることがわかる。「なんだか懐かしい」「自分の家の近くにこういうところがあった」「すごくリアルなんだよね」といった発言が多く見られた。被験者 2、被験者 3 についても同様な発言が多く見られた。

ここで、実験後に行ったアンケートにより、被験者 2, 3, 5 の 3 名の生活してきた場所について調べてみると、それぞれ東京都三鷹市、京都府京都市、三重県津市と出

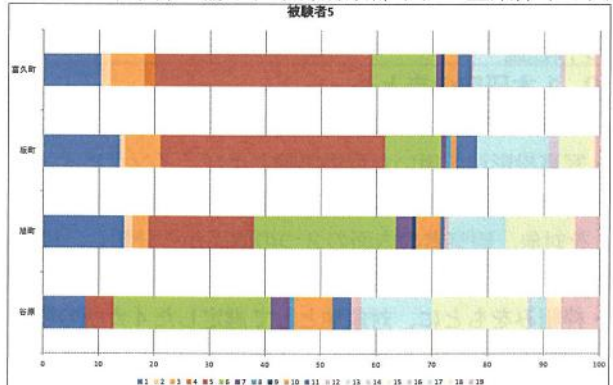


図 8.7 被験者 5 の対象地ごとの発言内容の割合

身地は全く異なり、異なる生活の仕方をしてきたことがわかった。このように生まれも育ちも異なる複数の被験者が自分の内面を投影し、共感を覚えられるような場所が存在し、この「自己の内面を投影できる」「共感する」ということは生活の風景の価値を考える際に重要になると考えられる。

8.3 捉え方のパターン

被験者15名の発言の分類の割合を示したグラフを図8.1に示す。このグラフからわかる見方のパターンについて説明していく。

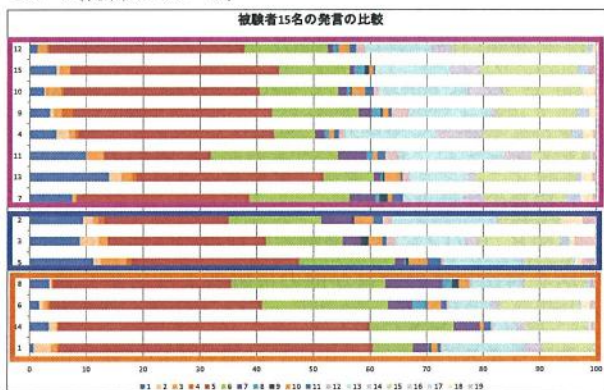


図8.1 被験者15名の発言の比較(対象と内面)

1) 対象の背景にある意味を捉えるパターン

このパターンは比較的興味や基準が定まっており、空間の状態やそこに起きている現象の背景にある意味を読み取り、拾いあげていた。その対象を捉える際にそこから想像できる事柄や、自身の印象などを多く語った。

2) 対象に自己の内面を投影するパターン

このパターンは空間の状態やそこに起きている現象に自分自身の記憶や経験を重ね合わせ、生活の風景として捉えている。今回の実験では対象となるものが全体的な雰囲気や、家全体、道全体など、大きなスケールのものにあることが多かった。

3) 対象をコレクションのように拾い上げるパターン

このパターンはある程度反射的にコレクションを集めるように写真を撮影しているパターンである。実験を進めるうちに自身の基準のようなものが形成され、それに従って風景を拾い上げているといえる。インタビューの際には写真に撮影された対象そのものについて述べている。

9. 結論

9.1 本研究のまとめ

本研究で得られた成果を以下に示す。

- ・写真投影法を用いた現場実験および、インタビューにて得られた発言により、被験者の生活の風景の捉え方を対象、観察者の内面の2つの側面から分類し、提示した。
- ・枠組みをもとに、対象地として選定した4カ所の場所の特性についても考察し、生活の風景として捉えられやすい環境について具体的な例を示した。

- ・生活景のステレオタイプとしてあげられるような狭い路地に洗濯物や植栽が並ぶような風景とは全く別の特性を持つありふれた住宅地においても、被験者が自己の内面を投影したり、共感を覚えられるような場所が存在することを明らかにした。
- ・枠組みをもとに、被験者15名について、捉える対象において捉え方のパターンが存在し、その際に自身の内面についての影響も大きいということを明らかにした。
- ・生活の風景の価値を考えていく上で、「共感できること」、「自身の内面を投影できること」が着眼点になるという可能性を示した。

9.2 今後の課題

本研究では新宿、練馬の4カ所を対象地として実験を行った。今後、より多くの異なった対象地にて同様の実験を行う必要がある。また、今回は被験者が全員20代であった。異なる年代の被験者についても実験を行うと、異なる結果が得られると考えられる。

<参考文献>

- 1) 社団法人日本建築学会、生活景 身近な景観価値の発見とまちづくり、学芸出版社、2009
- 2) 後藤春彦、景観まちづくり論、学芸出版社、2007
- 3) 中村良夫、風景学・実践篇 風景を目きする、中公新書、2001
- 4) 田路貴浩、環境の解釈学—建築から風景へ—、学芸出版社、2003
- 5) 木岡伸夫、風景の論理—沈黙から語りへ—、世界思想社、2007
- 6) 福井恒明・篠原修：グレイン論に基づく街並みの歴史的イメージ分析、土木学会論文集 No.800/IV-69,27-36,2005.10
- 7) 田中秀岳・福井恒明・篠原修：グレイン論に基づく街路の下町イメージに関する研究、景観・デザイン研究講演集 No.2,2006.12
- 8) 渡邊優：生活感に着目した東京都心の街路空間の印象評価に関する研究、2010年早稲田大学卒業論文
- 9) 渡邊優・佐々木葉：東京都心の街路空間の生活感印象評価に関する研究、景観デザイン研究講演集 No.7,2011.12
- 10) 野崎俊佑・千代章一郎：尾道市の斜面街区における生活景の形成、日本建築学会中国支部研究報告集第27巻、2004.3
- 11) 野崎俊佑・千代章一郎：尾道市の斜面街区における過去の生活景と感覚の問題、日本建築学会近畿支部研究報告集、2004
- 12) 野崎俊佑・千代章一郎：尾道市の斜面街区における現在と過去の生活景の問題、2004.8
- 13) 古川日出雄：行為の主体による日常生活の認識特性に関する研究—岐阜県郡上八幡を対象として—、景観デザイン研究講演集 No.7,2011.12
- 14) 杉浦理子・山本聡・下村泰彦・増田昇：居住者の日常風景に対する嗜好性と地区の歴史的蓄積との関わりについて、ランドスケープ研究 62(5),1999
- 15) 小浦久子・奥俊信・吉本正樹・木多道宏・舟橋國男：日常風景の捉え方の構造に関する研究—芦屋市をケーススタディとして—、日本建築学会近畿支部研究報告集 pp457-460,平成9年